

第三編 ケニア原住民のこと

スワヒリ語にボーマ (Boma) という言葉があります。これはケニア人の種族の複数の家に食料類を保存する小屋や集会を開く広場などの付属設備等全体を囲い込んでひとつの集落 (Village) を形成したものを指すらしい。ナイロビの郊外にある Bomas of Kenya にはケニアを代表する 10 種族の集落のミニチュアが作られています。10 種族とは, Kikuyu, Luhya, Kalenjin, Taita, Maasai, Luo, Kuria, Kamba, Mijikenda, Embu などです。

小さな種族までいれると 40 を超えると聞きます。私の運転手は、Luhya であると言っていました。彼の父は 84 才ながら、未だこの家に住んでいるとのこと。その家とは全ての種族の家に通じている草葺、太い木で骨格を作り、細い木でその間を狭め、更に小枝で間隙を埋め、それに藁と粘土を水で溶いた壁土を塗りこんで乾かすという手法のようです。牛糞は、そのものが草などの繊維分に富んでいるので壁には有効な材料であり、かつ燃料にもなります。私の運転手の父は、ヴィレジに住み、現在でも電気のない生活ですが、雨などを凌ぐにはこの家が一番だといっているそうです。新しい家といってもトタン屋根であり、雨の音が大きくて眠れないけれども、草葺の屋根はその辺の配慮があるというわけです。家の周りにはメイズ (トウモロコシ) などを保存する小屋があり、家の中では獣肉を燻製にして保存するとのこと。彼の子供たちは 11 人いるそうですが、私の運転手のように、都会に出てきて家庭を持つようになり、英語を話し、運転技術を取得し、最早、草葺の家には住んでいない子供もいます。着ているものも G パンと T シャツであり、時にはスーツとネクタイで登場します。父と息子の生活様式は、ここまで違ってきています。彼は、最早父のような生活はできないと思います。

ナイロビの街並みを見る限り、ダウンタウンには、高層のビルが建ち、郊外には瀟洒な住宅が並んでいます。私の家も、石を使った良い建物です。誰がこの技術を持ってきたのでしょうか。草葺のボーマから近代建築への飛躍を埋めたのは、イギリスやポーアの農民出身の入植者たちだけではありません。やはり、インド人の労働力があつたからだと思います。ナイロビ博物館には、街の建設に多大な力を発揮したインド人の功績が展示されています。

インド人が、手で巧みに彫り物や家具や扉を作り上げ、営々として巨大な建築物を建造することは、インドにあるタジ=マハール等の世界遺産の数々が、その証左です。古来からの職業と結びついたカースト制度から、その技術は親から子に丹念に伝承されています。ひとつの建物を作るにも、大工、左官、石工、石磨き、装飾、デザイン、カーペット、家具、どれをとっても重複することのない職人たちの磨かれた技巧が生きています。それを

監督し、まとめ役をしているカーストの高い者もいます。カースト制度の中では、不思議と彼らは運命に順応し、権利を主張することを忘れ、ひたすら現実を受け入れるようです。イギリス人は、そのインド人を3万人以上6年間に亘ってケニアに年期契約労働者としてつれてきて、モンバサからナイロビ、更に、キスムを結ぶケニア鉄道（ウガンダ鉄道）を作りましたし、都市もつくりました。インド人の貢献のひとつは、明らかに建築技術のケニアへの移転だと思えます。また、それなくしては、サバンナの荒野に忽然として近代的な町が作れるとは思えません。人類の知恵と知識とその蓄積があって初めてひとつの建物が作られます。その事実に気付くと、今、隣の家を作っている黒人たちの石切や石磨きの姿の後ろには、100年前のインド人労働者の姿が映ってきます。しかしその技術は、確実に黒人労働者の技術として定着していることも理解できます。

さて、そのケニア原住民について触れてみたい。それは、かつてアフリカを『暗黒の大陸』といたり『未開の原野』といたりした抽象的な印象の時代から、最近、日本のCMなどで、サッカーの中田選手がマサイ族の若者たちと飛び跳ねている姿や、特集などで、サファリーでのサイや象と黒人とが浮き彫りとなる場面を見、将又、餓えと病で死んでいく子供たちの姿をUNICEFが描く映像で見たりして、「未開の動物天国」で、「飢えと無法の地獄」の面もあるという具体的な印象の時代が変わってきています。

一方アメリカではブラックパワーの成長が近年著しく、学者として、伝道者として、スポーツ界のリーダーとして、そしてパウエルのように政治に大きく関与するエリートとして、軍人として、遺憾なくその能力を発揮しているように見えます。しかし、アメリカ系黒人の先祖は、黒人奴隷として主に、ギニア（ゴールドコーストからカメルーンにかけての地域）から、19世紀までに強制輸送された人々でした。その奴隷の数はおよそ960万人にのぼると推定する向きもあれば、6000万人を超えるという主張もあります。輸送途上で半分は死んだらしいのですが、行き着く先は新大陸やカリブ海諸島で、サトウキビ、タバコ、綿花などのプランテーションで使役されたとのこと。1865年リンカーン大統領の黒人奴隷解放令と憲法改正を受けて、ともかくも、自由を得て、力をつけてきたアフリカの子孫たちは意気盛んです。

アフリカ大陸の東側では、奴隷貿易の歴史は、むしろ、西側より古く、中世以来アラブ人がインド洋貿易として象牙と奴隷を主な商品としていたらしい。しかし1750年頃からフランスがモーリシャスのサトウキビのプランテーションに、次にポルトガルがブラジルに送るために、1800年頃以降は、北米向けに東アフリカ内陸部から捕らえてきた奴隷を輸出したとのこと。ザンジバルやモンバサに奴隷市があり、奴隷商人が住み着いていたとのこと。

1811年にザンジバルを訪れたイギリス人の報告には、あるオマーン人はモーリシャスやオマーンに、毎年6千人から1万人の奴隷を送り込んでいると記しているとのこと。1830年以降奴隷貿易は特に激しくなり、東アフリカ内陸部の社会に破壊的な影響を与えました。つまり東アフリカは、若い働き手の男女を大量に連れ去られたことにより、それ以降の農業の担い手を失い、農業の技術も伝達できなくなりました。更に、略奪を恐れて、海岸地帯から奥地へ、奥地へと逃げなければならなかったとしたら悲惨であったと思います。これは、西アフリカでははるかに大規模かつ長期に亘り、そのインパクトは計り知れません。それが300年の奴隷貿易の裏にあったアフリカ人の悲惨な現実だったのではないのでしょうか。

一方この奴隷貿易に従事したイギリスなどヨーロッパの列強は、莫大な利益を得、産業革命の一条件である資本蓄積が促されました。イギリスはその後1807年に奴隷貿易を禁止し、フランスもそれに準じています。しかし、イギリスは奴隷貿易によって発展したといっても過言ではありません。リバプールのレンガー一枚までアフリカ人の血で固められていると表現した人もいたようです。これが『暗黒の大陸』の現実だったとすれば、将に『暗黒』だっただろうし、また黒人を人間として扱わず、『黒い荷物』として商品化してきたことについて、欧米列強のアフリカ人に対する歴史的かつ道義的負債は巨大なものがあると思います。

1963年に、ケニアはイギリスの植民地支配の頸木を脱して、念願の独立を果たしました。2002年12月末ケニアは第3代大統領を平和的に選出することに成功し、タンザニアやウガンダとの協力関係の下、アフリカ人による平和と繁栄の道を探り始めたように見えます。ブラックアフリカの力は、これからの世界平和と繁栄にはなくてはならないバイタリティーと不屈の明るさを与えています。彼らの過去は踏みにじられかつ引き裂かれてきましたが、その子孫は全世界で、その共通の遺伝子からくる連帯の叫びを上げつつあるように見えます。

新年を迎えて、ケニアでは、キクユ (Kikuyu) とか、ルオー (Luo) とかの種族に分かれて、固有の風俗習慣を保持していますが、決してモザイク国家ではなく、アジア系ケニア人や欧州系ケニア人と共に、ひとつの国家の旗の下にケニア人としてのアイデンティティを確認しようとしています。多民族多種族だが、ひとつの国家の理念を目指しているのでしょうか。映画館などでも、上映前に国歌が国旗とともに吹奏され、白人から黒人までのケニア人が、老若男女の区別なく起立して、画面を凝視している姿は、好ましいものです。初代ケニアアッタ大統領は、キクユ出身であったとのこと。モイ前大統領は、カレンジン (Kalenjin) 出身であり、キバキ新大統領は、キクユ出身とのこと。しかし、初代ケニヤッタ大統領は、本名が別にあったとのこと。恐らく、種族の匂いのする名前を伏せて、

ケニア人の代表としての名前、ケニア山に因んでのケニヤッタを、所謂『通称』としたのでしょう。息子ウフルにも **Uhuru**(自由)という通称を与えています。初代大統領のその命名には、決して出身種族の代表ではないという意識があったに違いありません。

今年は、ケニアのブラックパワーが、大いに成長を遂げることを心から期待したいと思います。

《参考文献》

- ② アフリカ現代史 II 吉田 昌夫 著 山川出版社
- ② 100問100答『世界の歴史2 中東・アフリカ』 歴史教育者協議会編、河出書房新社
- ③ Bomas of Kenya(パンフレット)